思ひ出

橘　糸重

皆様から色々仰せ下さいましたのに一度ならずおことはり申上げましたことをおゆるし下さいませ。それでも其時の私の心持は充分御察し下さることゝ思つて居ります。人の死と申すことはをさない時からあくまでも知り過ぎるほど知つて居りながら、先生のそれに思ひいたる事はどういたしても出來ませんでした。御老年の事はよく承知いたして居りましたが、それでもそのやうなかなしいことを思ふことはどういたして出來ましたで御座いませう。御無沙汰を申上げて居りましても、横濱にいらつしやる事を思へばどんなにか心強う御座いましたでせう。それだけに何ともたとへやうのない心持で、ぼんやりいたしてしまひました。

きせ子さんからの手紙に「どのやうにか力を落したであらう、父上をなくしたやうな心持がするであらう」といつて色々なぐさめてありましたが、あゝなるほどこの心持がさういふ心持なのであらうかとやうやく思ひいたりました。生れて父を知らぬ私は、そのやうな場合の心といふものを思つて見たことは御座いませんでしたが、きせ子さんから教へられてはじめてただいまの自分の心持をさうであらうかと氣付くことが出來ました。

皆様が仰せられますとほりそれは私にでも思ひ出は御座います。それらを思ひいでますまゝに申上げればよいので御座いませうが、どうもまとめる力が御座いませぬ。九年まへの八月、東京をおたちになる前夜、「いつものとほりきげんよくAuf Wiedersehen!といつてわかれよう」と仰られ、お玄關まで送つて下さいましたが、思ひがけず横濱の出發がのびまして、私達の爲には貴くなつかしい年月がそこに御座いました。

四年まへにふたたび御帰國といふことで御座いましたが、これもまたおのばしになることになりました。恰度三月のはじめのある雨の日で御座いましたが、私があがりました處、先生は「自分が歸國といふことになるとどうも日本が魔術をつかつて歸へられぬやうにする」と仰つて笑つておいでになりました。私は「先生のお弟子達の引力で御座います」と申上げて、嬉しくおいとまをいたしましたが、其時

私がまた「日本には三度目の正直といふ諺が御座いますから、もし先生が御歸國を大變おのぞみになりますならば此次は三度目故」と申しました。先生は「それでは此次は多分ゆかれよう」とお笑ひになりました。三度目に先生が日本を去つておしまひになるといふこと、私達のためにどの様につらい事であらうとも先生がそれをおのぞみになるのならばわたくしごころをすてゝ先生のおためにそれを出來るやうにいのらねばならぬことは、もうまへ〳〵から心の中ではかなしく覺悟をいたした思ひで御座いました。

思へば三度目に、まことに三度目に先生は――とう〳〵日本を去つておしまひになりました。――それもこのたびのやうにしてお別れいたさうとはどうして思ふことが出來ましたで御座いませうか。夢のやうなと申す古い言葉が新らしい意をもつて胸にせまります。さていかに思ひませうともいたましくつらい事實をどういたす事が出來ませう。

かつて私に不幸の御座いました時、先生は「いつも同情者である事をわすれてはいけない」と仰つて下さいましたが、このたびもやはり――私達にとりましてのこの一大不幸を――はるかな處からあはれんでゐて下さるで御座いませうか。

この様なことを申せば限りのない事で御座います。まとまらぬ事をくど〳〵と恐縮にぞんじます。それではこれで御きげんよう。かしこ。

七月はじめの日。先生にお別れいたしてから二週日あまりになります。

――――――――――――――――――――――――――――――――

これは四年前に書きつらねたもので、其時は不用になりましたので御座いますが、此度お言葉により思出し一寸おめにかけます。大部分は久保様から先生へお話し下さつて先生も御ぞんじのもので御座います。

昔、　昔、　昔、

先生がはじめて上野の學校へ見えて教へて下さるときまつた時、どの様に嬉しくも心配にもこはくも又恥かしくも思つた事であらう。

私の最初の第一時間のおけいこはベートーベンの五番（Cモル）ソナタであつた。拍子も指づかひも何もかもまるでわからなくなつてしまつたのを「さうこはがつてはけいこは出來ないではないか」とお笑ひになつた事を思ひ出す。いつもよく思ひ出す。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生が白山のおうちから大學へいらした頃、おかへりにいつもおとほりになる坂の處に、おでん屋のおぢいさんが屋臺店を出してゐた。其おぢいさんは毎日おひる頃になると「もうお歸りになるだらう」といつてはお待ちしてゐる。そして先生のお俥が見えると店からとび出しておぢぎをする。先生がやさしく帽子をとつてこれに答へておやりになる。白山の聖人といはれていらした先生から御あいさつをかへしていたゞくのが嬉しくつて嬉しくつてたまらないのであるといふ。（これはそのおでんやが自分で俥夫にはなした話）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

白山から駿河台へおうつりになつた年の夏の或夕、學校の人達を先生がよんで下さつた。お家中を見せていたゞいた時、お二階のたしかストラッセルのお部屋で蓄音機をかけさせて先生がお笑ひになつた。私達は先生でも蓄音機をおきゝになるのかしらんなどゝ話をした。その蓄音機はあまりよい音もせずしかもその曲は日本のものであつたから。（これはストラッセルの所有であつた事があとでわかつた。）御ちさうをいたゞいてそのあと色々ひいて下さるのをあくことなく伺つた。

歸へりに先生が私に忘れ物があるだらうといはれたのを、何かとあともどりをしたらば「これはおまへのではないか」と太い〳〵ステッキをお出しになつたので、皆で大笑ひをしながらおいとまをした。

其後しばらく學校で其時の人々からからかはれた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

先生はよく夕方にピアノをおひきになつたので、白山のお宅の時も駿河臺のお宅の時も、よく學生達が先生の塀外に立ちに行つたといふ。その連中が或時或處での話。「夏の夕暮は蚊にさゝれて困つた」と一人がいつた。一人は「巡回の巡査に君はさつきからそこで何をして居るのですかととがめられた」といつた。又一人は犬に吠えられて這々の體で逃げ出した」といつた。（此犬かも知れない、私が先生からその寫眞をいたゞいてゐるのは。）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

大正三年八月八日のこと、先生が東京をお立ちになる前日の夕方、先生のお宅の食堂に私も坐つて居た。それまで毎日色々の人の訪問でかなりおせはしい事であつたのを今日はもうそれらもすんでまことに靜かな晩餐である。この食卓は先生が日本へいらした其當時から先生におつかへ申してゐたのだとい

ふ。先生は何でも古いものゝ事を「ぢゞ」と仰るのでこの食卓の事も「ぢゞテーブル」と仰る。此ぢゞテーブルの上では先生の學生さん達が色々と先生の貴いお話を伺ひつゝしば〳〵御ちさうになつたのである。或時はその下で先生の可愛がつていらつしやる猫までが小さいお皿へ同じ御ちさうを分けていたゞいて居た。私はこの由緒ある食卓へ先生と共に坐つた最後の者である事を有がたく思ふ。先生は今夜はもう最後の東京の夜であるから機嫌よくしてゐよと仰られる。何くれとかはることなくお話をして下さるのをともすれば一ぱいになる胸をおさへて伺つて居る（十二日の横濱御出發がのびてまだしばらくお目にかかる事が出來やうとは其時誰が思ひかけやう）。それから稽古をするのによい曲や讀むのによい本などを色々教へて下さる。さま〴〵御馳走をいたゞいたあと、特にこしらへさせて下さつたアイスクリームや、久保様がむいて下さる水蜜桃を葡萄酒にひたしていたゞいたりした。

この夜はまだ少しおかたづけものなどが殘つておいでなのであまり長くおさまたげしてはおわるからうとそろ〳〵立つ。先生はいつものとほりにして別れやうと仰る。私もやう〳〵ごきげんようとだけをまをし上げた。御門へまがる處でふりかへつたらば、お玄關の處にまだ見送つてゐて下さつた先生のお姿が電燈の下に大きくにじんで見えた。夏の宵とはいへ駿河臺はひつそりしてゐた。なつかしくかなしい思ひにふけりつゝゆくにふさはしい夜であつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

或時先生が「此頃は何を彈（シュピーレン）いてゐるか」とおきゝになつた。私は「私のはシュピーレンでなくアルバイテンで御座います。ベートーベンのソナタで御座いますが」といふ。先生はお笑ひになつて「アルバイテンならばまだよい。ツアンケンでなければ」と仰つた。なるほどピアノに喧嘩をふきかけて居る樣なのやピアノと組打ちでもしてゐる樣なのや――一寸をかしくなる。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

或時、私が「東京は横濱よりさむい樣で御座います。何もかもこほります」といつたら、先生は「さうかい。それでは音樂もこほるかい」と仰られた。

【入力者注】底本と行を合せるために、フォントサイズを小さくした箇所があります。

初出・底本：岩波書店「思想」
大正十二（1923）年八月一日
入力：小林　徹
公開：令和六(2024)年二月十一日
修正：令和六年二月十二日

橘糸重【散文作品集】に戻る。